麦林集

下

へ 5
4426
3

3

門 へ 5
4426
冊 3

昭和九年九月二九日
購求

麥林集巻五

神祇

天神奉納

鶯も三枝を習へ梅花巻

南枝より北は北枝の梅流し

千枝の国を万人をかゝる梅のかけかな

○奥下

㊀

桜もその花寺龍華や梅の花
歌も詩も此盛の姿や梅乃香
回り綱に百味之の形や梅花面
白雨や蓋も流して神楽済
春梅に鶯も喜悦の初音かな
所々見れ日も長く自在竹
熟く見れは酒の匂ひも花柳かな
加の花に栄れ当山や神の森

神風や梅花を散く国中
神の蔵を祝ふや梅の匂ひ多
桃は葉栄残の形や梅の宿
情の名も野は吟しや菜に便り
春へ乱れ月さや月桜梅乃香
信心の深く人やかくもの哉
深く愛乃匂ひも高し花し葉
神垣の梅に幸廻りしたし梅乃花

萬代や詩の宗の苔むさのつゆ

梢まて八幡やうすく霞哉

北野奉納

木のつゆのしほる絵馬に名をかくや明日

菅神八百年忌

飛梅や盛日は霞く八百の春

初懐紙神奉納

筆さし樹はかくれしても世の中

北野奉納

神垣や百味膳出ス饒

二月末の五日ハ菜種の神事や

神垣や菜の花ハ文蝶乃舞

北野遥拝

涼しさの紙屋川見え東一奇也

小野奉納三物

蕗も宿る北連や思　猶織

○葵下

れは流むさふ未ば有苗代

花の中に移りし秋の田うへ哉

月次初會云神奉納

水は流や蛙の聲もそれ自ら

加之例の社奉納奇状の讃に

錦寄や明石と近江伊勢の海

亀山八幡宮奉納

松は花それ緑しめも男山

星合社奉納

見も又錦の丈帰や二ツ星

宮寄奉納

う哉錦や見ても神代の一景

加之例奉納

鯨も見ては端しき神の海

さゝの神楽あり

八乙女と詠むるやいさゝり楽

里見の社奉納

立春よ空ハ己らで女前　花

加られ例社奉納

浅見と咲や千種の神れ秋

弘の神明奉納

神垣やふとし出をそて弘の雪

狭又神明奉納

鏡子の尾を顔よ東酒りなき春ハ

先立明奉納

弓張の龍よ白羽よ蛍哉　何

卯の花もてしく星木の角居ハ

八和れ祇他神明奉納

八乙女ハ同よ調よてり夜神楽

祇芝舍

あけぼのや宮戸山より初見花

神祇の和歌を俳かいに詠して

みなかみも五百枝の鉾や五十鈴川

春日社奉納

松かせやよろづ山の名ハ枯れ

冥宗井椋社奉納

鶴鏡も古く祝くや神の道

はら石ましく

いく代の神もすてやはらはら石

夏山や十二一宇やはらゝ石

神明奉納

五位鷺も来りや松の神楽寄

星宮社奉納

手向るや稲の菊に枕硯

大和萩原神社奉納

春雨をとをし燈子の神ゝ縁

日将堀神社奉納

秋もはや懐に葉の神門ぐ

餞別

蓮二法師を送る

素秋のほしや解くゑことへ

涼菟を送る

水鶏にも如くはあらし旅の宿

桐雨へ

満かし頭のふに見き時

蓮二坊へ

年の夜はあれしと旅行の秋かゝ

桐雨へ

萩をおしく離愁に句やおもしきん

出羽嵐七へ

卯の花と道のあかりや何百里

更級の木に伊勢は志ほらく
そこ残らんしこりて〜やうて
ゆうらんしありし附

昔日とい杜丹ひうその名をきゝし
思園の人れ来ても飽れ卧と云る
猶不つんとれ道の便れ蓍とほり

淡秋か大和へ卧と云る

卯の花れ雲踏こめて宝ずし秋
汀世人へ

ありきへの連はいましく秋の旅
淡秋か和れへ趣り

ちらふあとみゆ名所の古ほうり
芭三は師へ

見つかしくやふの天皇れわさと宝

若狭へ

時ハと起の冨士もふもの一声

三好雪信へ

逆しくも出いる也さし　古筆

簾七ヶ浦に訪と遣し

雅ハ文卯のむれよら經　時

素道居候ヶ京師よ訪ヒと送る

侍はれ往康にいささか一る去辰　雅

芳隠ヶ故に訪ひと送る

逆しくや太田殊によよく夜の[illegible]

枝まと遣し

菜と頌よ額しく一[illegible]有り松よる

若狭へ

孫の子ほれよ猫の秀れし向ふり

翁の雲かれに浮かと流みるべ送る

ほくきれ入る匹ま木の芽流かる

萩秋へ
霞皇の作句をあれ露に雁かれ
作陳の亭雪こひしれ大和に郡く
彼ハ伊勢にわかれ萩京に
ゆかしれ
萩にわれも萩にと勢かも秋ちかし
北堂月の名おはれの芦辺と流にしく　某
名月のちきを茂みにちかき名れ
湖光に照りし時わすれて

涙やそ浦越えれハ
こゝろにもしかへ扇の雨
吉山々大和へ帰ると某
ものゝ光そしられ浪と浮れ錦
悦少年へ
さも見えや風に流れをも風中
難波へ釦くさ方と流にしく某
流れをめのこなし句時雨しきあ

京へ今のほるを仰らるゝ驚破よ
諸訳と云へ
そうかけも宿坊にて教へしは
僧に対し人と云へ
ちけ堂の縁の月や風の便り
里見に対して人と云ふ
便せよ時雨しく秋富士の秋
京にてをとる

咲の花いろあまたし武蔵野
風人と云ふ
野に宿りし暁に見し月武蔵陀紫
其時の流れに対して云ふ
京を別かれのわし坂田の五十
京にて花と云ふ名
春風に梅の花かをりし信田川
風童のかふれに対して云ふ

まつ坂やからの水の面白さ　去来
丹波の水さへ竹と落る
宿かゝる門やゝ雪の鐘　白雪
落秋へ
荒れし鐘の大和の名こそあり
卯月の末孫の白旗の流よ
卧と落る
京へ向日やかゝる旅の足袋

丹波の一わきへ移むく時
雅名合も累もわすれやすき様
相白へ
帰るさハ名の末を隣の歌
又旅の香にも入らんと落る
京は都しこそ向ありて朝也
落秋へ
橋立し彼の帽子の朝日影

花採に寄る
梅見の望吹處と萩波
尾張の之子か綴れ錦を寄る
若草に菊の雛か芽んや白き唐
吉山を寄る
是明に露関に紀ん栖の宮
花の花か難波に都を京によ寄る
川むしの底と詠ゝ岩ヶ岬

落秋へ
あきかぜや風露の梢花
葉心は清に面く御伊勢に浄る
見け望や旅と寄るとの深き東れ
鶴を見ける時衣を寄る
あきかぬ国も見ん安きうつゝれ
葉道の見濃に都を寄る
初明け思りもよし　秋日和

ちさんの三聖付志へ
やさしの縄さこそ動を持朝舟
書写を着る
こゝろ多れ花も濁されぬ知ま
三武の画賛へ
京のけやさはの山おち薄みたる
京業の中生へ斟を着る
甚ときさ浪の流て急れし

弘の一面を着る
神風や三け皇の帆も我日本
かでの里祠を着る
旅らちのちらしめくくし田植哉
朝多き度ハ元年夏
俳つ入しくおう庵業了
心をよむれ生よ祝常をこえし
久よ象深を稽身の不の他ふ
なうりききれハ志きりに深ぬ
の志で霊しく嫌ハ着佛

宗のやりきしにみより森士訊
れ枝まな隣の古を借見も
たうしき首筆まる一し
汐皇に古守き蓼ミ一しゝゝ祝
十方庵か長仏頭衣のほい
卯のむひれ雲を諸初しゝ杖
十とせよ修まりうらしあ栗坊
か源泊いるうれの梢を秋よ
そとらかなしもそも禄らう空
めぬうられ宮のわ来もおう紙
心阿くそ鶯ん執

初冬や旅れ宮か笠風に誘
女竹を伸ひある古山を宗右
藤をぬしらまもを脱ぎ長衣
加れ生の幸右
皇樋し白ねかふう派一曽れ不
松木氏加れに卦を宗右
涼しさや元門おうう風扇
孤の手お住師曽秋の涙す

ふる郷に聞れし哉か
月の名に取れて引き名残
残れの旅寝に屋せしき
き迎によ　うらやましく窓し　腰寄
京寮の對馬に對を送
時雨にも海弱おもい　糕硯
葉名の乙架か鏡高を添し
く浪より花にに帰ると若
かし麻と鏡高れ見えすぞ夜あそ

若菜の孔京寮を若
まつよのこと有や夜の水
花浪か四に引を若
打ちんの月を見て山辰顔
なに若菜にかく和哥の
浦浪も打ちよるのか雲仏
天帆の旅に悪れし
桜よも道の名や和の哥の浦
若葉に須枝七生のおまと

情ミゝ久しかり行在ニ画わす
なふいまし法ニ示れ
にきしの雁ニ携かりさられけ
淵巌を見つ
けちんれ積通ふなりの西夏江渡
奈良道と見れ
夏菊の空も鐘くや三河よく
夏陰の白花人の果語ニ

一秋風ハ裳をふき乱しと
道すから行人移りくゝと鎖ハ
てや伊須の空をえ見る
時雨ても乾く蓑有　梅羽
識
此の侍花移りしをふけ木つを
まくゞ家ニ信都見きもれハ
西行花れ吉園ニ移れり里
冬枯の浜萩ニかゝりけれとく
かの蕉翁の硯ふし記る々や
白きなれ須磨と勝ちたり
むしを拾ひし波居の小貝哉

袂をむしられは子寒れ
孤舟ニ得所の行ひ志きりに
しく翌日ハ吹あれ時雨れ
ともかくなりけりや

稲負ふや二尺ハ鶏の啼　ふ

きのふきの末にいたる所に訪
まつり祭の萬歳の浪清く
舞うちんとちきりし

あふ坂の関に待人藤　卯

何某山氏の東武の首途を送る

かしらの夏見て一富士　初茄子

九花の古尾に赴くを送る

涼しさの日記待りや古傳　枳

湖花を送る

ほ咲もあやめや頭陀を牛　候

信長柄二と送る

一弓士の子孫も今に在れ 羊歩
素堂のこれに跡を遺しく
時句にも名れ行しるき夏藤浪に
然れ伯雪平山の大和へ跡を遺る
なつ坂や涼しさ京し 晩時

留別
奈良まくくにおもく
勝鳥は晒衣秋の名
かれ桃妖へ
酒の句は硯見に紛しくおかな
大和に契し時悉伴ひく京れ

かざみあるき々又家に帰る
まんところ
去ゆく秋国中もみこ三橋の秋
ゆふ夜ハ芳野の秋寒さ
嵐山にあらしの錦冬に近ハ
唐の秀れとくかきりぞ落る
国よ平に楽こ楽しり 庫和泉
競馬の頃より家に至哉
早見北の涼風を請よ秋を

夕ゆふ秋や霧しに舟出の家の学
一茶庵の名秋よ庭の楷
芙ふに蔵りあれ
おも影 秋いうりし 皇坊主
小雪月昔をり清き様ミに
京女に師の一句に黒さの日数
かゝるさゝ時の名秋を情む
二月まかり涼しさゝて第荷 肥川
大和竜ル何京のり秋おとく

秋風や枝に清れす時雨の後
遠路の人にまおと情む
遠浅瀬や波に立かくし大根畑
名粧花秋の二傍は色のゝ
さ残しれうき菓に傍々も
所に訃きされは文花きり
浪にそくすりゝ反古の中にて三人
宗孫に何ゝう絵花あるそや
名に頃をしに乃おそしくゆりて子

名湖楼の柱しひに強黒れ
情膳を忘きく初秋二日に
宴の名残を立ありしとく
古風の秋に移らく草り姓
常名に使ありにく
芥体にふ図にふらをし帯の山ふれ
菊手覧ゝ紙に柱はう
日あり乃ふや遊路の名残を
松りよりなきの色何をくれ
不はや取り人れ出く扇川

こゝろあさかれく蓮の露　此
宮居を飾りしく

こゝかしこに風涼しきおもかれ
ちかひくゝまおかと情く
顔見しや顔しさく海風伊勢の

麦林集巻六

名所

詠とおかゝりまく
ともかくも都の秋の空乙
星川はゝく名より晴く
ゆくれは星のとむしの人
はれしもりふく

捨られ子のハ京なれと姥か乳
伊吹山よし
真綿の京国ハなけれか伊吹山
きこふるよし
里の子の裸も涼し笛ふ雨
三幅よし
京麺より性子の営在か仰
余花の句よし

鳥囲ハ白し鷺囲ハ草なれど
更濃肥よの里よし
荻を見く居きハ露か陌きかり
乙昔ゑ葉よ風呂君の御帯
ちらましくりふハ奈良の京
よ秋を係よし
田舎や猿さ不もこ鳥やとし
草狂のよし
冬かしや浮ね猿のよ古筆し

木の葉涼しく
障子間にあかりに寄れ涼み哉
細川木の実ゐよく
実らしきあらき寒き行や女の師が
い涼みの池の流にて
とこハ又寒の海にもりく涼
醒井よりく
醒井にある菜の頭ハ青う寒あり

醒井や芹も流るゝ岸の花
みなの里よりく
玉水や恒に流れる田をあかれ
涼部よりりけて
茶のむしにある涼しや影寒し
神童月の光に涼しとも
春のよつよ山かけハ涼しやさし
孫をわかく時は寒し　隠居　一麿

蛙ヶ傳よく

旅人よ賣子哉人蛙ヶ笹

佐野く懐よく

野の苞やふハ風流佐編ヶ筆

鶴齢くよく

村居の内を移りし笈秋の暮

野澤の里よく

野らき北名やとも咲桐の花

三河國其ちよく

菅笠も六所祇に始め卯

市宮子と此村ハ東氏の末とや

葛州の魚さへ流れに住みて

はふのちよく

須磨寺ハ根やまたふくさへ行

東名の濱の比丘ハ德京

ほそりなしいろまおもよや

あやしき魚も白魚の一寸と

堂の柱に踏さらしるしや
印も此処のりしきれ杖と
そゑん〳〵

蛤の二見殿へより夢の洲

金坂の名によく気を見伝らく
今やおかしく実の清水に気乃郎

冬の月れ時雨に曇りほも
一ふしれ見ぶまとりや秋の
秋はさゝや此れも月の空ハ
流に移ろしく廣沢の月に

納涼と覆きしハ花の纔れ
千里よもかへしとハらちの
暁明よりまいなるへき芋ハ
栗の名に付そんとかく
雲ハ芋れ下にらんうかし
と此二つの名に来へく此名月
此そんふゆ明しね

玉を産鴫の浮葉や池の月

東名をみ觀音よく
此佛に聞ゆよみし　秋乃ら

阿漕浦にて
千にすれ藻屑も宿し浪の泡
添き晦日田村川をこえて
光陰の矢もわたるや田村川
初瀬にこもりて
閑さや里ハ晦日の紙経坂
主婦にて
二月の枝れむしや夜の裡

美濃三信
三保や河原の芽に数ハ添し
石山にて
石山の石もうけ流れ雨管
象潟にてよめる紙
きさかたやところへ海帆の居の変
浪添三彩菜屋にて
新夜にて残に夜や春雨

千句塚

星崎と所寄てや千句塚

多年の旧跡よし

星の子此間以ほしし紅殿かな

鈴然奥染より富士峯をみて

詠ありし富士や須染の一下庭

鵬の清水よし

其外に聞へし鵬の清水に

伊勢寺と云所よし

あの寺と今もきゝし杜宇

伊勢吉地と云所よし

すみけりやすゝ地を掃流清

星川よし

我寺にありて星川の水まつり

出花の滝よし

百をみとき其して涼し流の道

見堂の名を作られ給ひ
御手し御く美ふ折て
さ年の梅当られハ
見てのうや実を得年の梅花
法の双林寺西行庵よく
寒桜やさきふれ種の前許
嵯峨山よく
五月雨や木負も収む流の音

西行谷吟

蘇後ハ流ハあれとも其跡もなし
寒ハ桐に時つくし猶しれ
上人の昔にあへしハ栄雪
庭なれて後ハ落し葉そ花
庭をよ写士に見をうつしの峯

浣渓に波千尾の清れうかし
ぬ四よ五彩のむらしきわりしふ
朧の氣濃く芳ぬや寺嵐
此亭の晴千尺ぬや亭　佳衣
ぬ萬いの里の肥ゆる後の内
芳さ故杉り人芳ぬ乃　硯　衣
円位上人の五百年と云
まし此亭に記しく

五百年枝にいたりし花しかな

画讃

芭蕉翁の像に
昔池かなと出しぬ乃中

荘子の讃

草木のむれ多りしなん蝶の夢

眉作の讃

眉掃ハおもし眼的なる花画

海棠のさん

海棠ハまた眠りめく咲より

竹林七賢の図に

七人の手をとりあれハ同しきん

葡萄のさん

度よまさるく葡萄よ秋暮ぬ

杜若の画よ

かさ仮の蝶と化てや燕子花

天の橋立の画よ

一筋のきるしとおはすくや時雨

茄子のさん

市にいそく錦紫の茄子かな

間鍋の讃

遊の名ハ何ぞや何ぞやしは
富士の画に
まし世にハ咲れ居醒めての色
見の背むきし居る図に
百年の名れ見も志ざすや冬風
普化禅師の図に
鈴の音ぞ雉ハ下にとまりけり

布袋の讃
提子に舟を包しく冬こもみ
人麿の像に
その筆も節くやきそ木のやら
夏ハ菜花に隔し見秋ハ
うき世の夢に寝し
清には呈も咲けや所さく来
仙人の画に

こがらしさ北風を吹きや瀬の音

布袋の図に

いよ似く袋も中に包れり衆

水草に鯨を引れ給ふ

藻屑との鯨の骨ゟし藁ふ風

打よ帆を手かるに

百眺く鶴も又よし一つ雲

稲塚ふ花をおるに

逗ふく居祖父を袋つや稲莚

猿の画に

青楓の条ハ抱まあ猿乃曲

髑髏の賛に

そていみれあきさの骨や秋の風

兎の讃

何を呼ゞ何を見くて居秋乃暮

七夕の讃

七草は野に採よりて露の数
桔梗に写の涙
おほしきは粟は鹿の影しる本之
手羽絵の涙
稲置殿は月に見えまやう神さ
芙蓉の咲のさまに
源さ腹ぬ咲や芙蓉の暖より
西邦の極隱比とに

旅腹の事を見まそて清れに
波に逢の西よ
逢は丈婦持ふや行男波
布袋の跡を弾る西よ
営の跡に持つや糸柳
水鶏の童に
補将入の主れを歩れ水鶏に
芭蕉の絵よ

芭蕉葉や大き廣くも鉢の杖

露の讃

横一よに粟ふりしや露の玉

月花猫の讃

けふあすも昔へしさかりを

猫の画に

うつり行れ猫や火燵も閑中明

白雨の画に

白雨や暮も凌くむかふよみ

月の讃

一輪のかゝらに照猫と青乃卯

波宮貝の画に

春風や波をそれに弁仙貝

奈良の玄楠老人ハ蕉翁試

其子寂しくるその國に横しく

丈艸子ハ風の弟ハ往師翁の許

とも云しハ元禄の昔なりけり

老人の乞家に啼の渡し哉
まろしもといふむしゝやうの
人くれ来にまう錦く
風や萩とふみても　様り　萩
杉に落ぬるれ
十かつ里の杉ぬるさや紫ふふ
猿の西に
杉杉に岩や菓ゆしく猿の子かな
此しまに月のさしかゝるれ

那しらやのさらしを照や月の眉
菊花に附る手まる西に
中にもさる翁との孫や何しきれ
花の盃れ
老落の花の矢をやしてしまれ市
高れ舟に花を手れ縫ね
老翁の雪れ形ふ　や　編る　紀
こ番吏の西に

稲莚や秋の穂に侍行の限
牛の角に
牛の背に銅秋らや草の花
菜れ絡れ
菜の花咲髪にゆるやかくれ
云ふといやれゐの波
硯にも筆れ茶や梅の苔
色石の波

晴くれ行こゝの夜初しぐれ
菜花の二尺文台ハ
西行法師にそろう行ハ
西行の秋暮るや月白し
梅の花に文台の春々
辰ましん
菊は舞ゆ梅咲けらし出
鵜川舟の話に

月花の同し体ぞやはしきれ
花の恵よ
花も此まゝく行のあれハ

悼

葉ぞ好れ人の身後ゟ名ハ
草菊よ蝶もはえさ哉まゝりも栄
桜木の身よりりれよ
桜の露ま何れ秋の木下りれ
偶りも乾れぬ袖れあきかれ
常れ絶てふ桜れあらんと　乞之

ゆきて五日有海の客人のかたへ

面白き峰や桃乃頭きらく跡

蓮二一坊を悼

月寄とかん手れまそや桜の渡

きのふの袂にふさをくまじと
苏橘と人日の一章にはせ
と云仰し人のかたへ

花あれそや苏にあらしく浜の音

わかく庭桜にほらり松に寒と

辞世あれハ

雲に句ひほろりに桜かな中

蓮の葉れ登や滝の欲桃すゝき

首なき枝折と宿紅水錦かれ

涼菟を悼

何ぞの竹縁暗りそ月しきあ

千長を悼

身を入く夢も竹時や忘れ

伴の好帳にも香ひれ夕あらし
朝きさ以せい浮草のむすびし
茶つよもふしくは向ぞ座せに

暁ヶ月ヶ方にありける時書
のけ京ゆかき人云きし侍る
是も次き月のきよふのゆるさる
鞠をぬれ人の方にありけるに
主人と同じて旅か一首ふりね

次年の停ヨ
霧の観しくあしきしへよあ
指ても晴らぬ首えふらく哉
墓にまろく包むみ首飾名
草意を待へらまふ人の方
次ありけるに
開始を協やる程のむかふ数
花き侍の方にありけるに

雲こに入れるのふところや雪の月

喪に籠る人のもとへ

一葉ちる日数かそへし柳かな

落るにも一林にも同の音をきく

ちるぬるもひともかなしき藤袴

某閑か妻の身まかりけるに

伴を脱にかけらしく女郎花

一日ふと折りしとおもひおく

その時と一家の別れ時え

八月二日武蔵にて身

隔りける人に悼

花しゃれてもなくなれそ入主二日月

予か心尼か身まかりけれは

きくし緑せりやし露けし

にそれさらにかかりしとやさしく

不易文字のさうさへもあらう

にかれしくて

毎月に詣うける某寺に花わて
極楽堂の落成しける時
佛に仕も只一向にありく秋暮ぬ
出家に剃髪しける人に
入月と隠れ法の月まさる
名月も一つ詠けく世とさりぬ
老母の喪に籠れる人のもとへ
涙に影の月ふかけれし秋の暮

時自ら筆や下秋の深山奥
東門自然法師九月末に
六日既に黄泉の旅に赴く
を追ふに聞くも心ぞ知らしたく
皆うちとふくく泣き給ひて
見る者に別し同席に記念
と於しして何詠一紙とめし
心なもを顔き頼み来し
濡衣の袖も帰くやきるれ
も〳〵根や山に詠ても此に入ても

雪つみも雨にも知らし夜の友
母の身を深くかなしみへ
男まさに思ひもしも死し様思ふらん
十方の道しるへしおくりし雪の跡

父のむかしを祈りけく
郭巨は似被境竈の桜かな

つまへもかれしきものとさよふる
本国とかけれにけらと身
何より勝れしや
名本の海一日をめや一しくれ
かへりてハ思ふと帰や友ちとり
冨貴人の身まりかれ
世の中は風に依結別し父に母
此墓も日を移ちぬ行き春し歳

善のあやかりくれたる人
なきたれんへ紅波乃濡れ
　芦辺かさ常に首中は
　なつきし紙衣かくつれしと
　かりくしもし
月ひよみ後まて經し紙衣に
　翠宮をねよとのみ月
　西りけれ
水仙よ芋鉢のもうちまふ芋

蕨さへ椿折や下もし
　祖父五十回
夏白の夢のちりしや弁の忌
なきのいうしし是しも昔なさ
　源峯元政の塚に詣して
多れ詠つんとりや竹の端午
　双林寺蕉翁の石碑に
不ふ之の謎と翁ふや君きとなき

懐旧

菜蓮の帆に夕波のよすか妙
人も菜も初むかしなり夜半き

父のむかしをしのかれわく
隠るも咲くなんせなり西の思

旧宅にて
蓑虫の啼にはけても秋さへし

母の忌日に
秋もさり我はさびしくきりきりす

蓮翁の忌に
まる花にとまふや水仙花

旧友懐旧
その人の植し梅や高の花

追加
正月のはつ日と見るまいく

おもはれ入もゆかしく三日月

うれしてほにおもしく

見露の月にもみえいれ千代川

洲の鳥角之通になおくりも

花の月にえんきろこげしもみ楓

観吾季納

草も木も紫の細い乱るゝ

自適庵之記

于茲宗人あり世で神沢山の樵子

の名残又て信れ流に清泉の片で住ま

おりゑの小の閑窓を詠ヌに或い茶話

時で移しく詩讃薫香にひまあり

信局しくをとの眺望れ世銭

志まきうなてや宗にあふくり

唾をとしなき詞に似たりとやされは
あらきをふるさん者は俳諧のうちむよ
まゝわかく四時乃変れとわかれ
作ても反古ゆ何しに出面似たり
山のすきもきぬよにかはるくうらい朝ハ
露のたちをきくしれおりまれ岩の
省るんハ往くけ何くもかしこ歳月の限り
すゝなえをりさ梓ハしまゆ何し尽れ

ふかくしもせよみときゆるよみきりへ翁の
松風よよとをせぬ方をはす芋からしられ
手よきハ俳諧のうかちそをれし
くしをやえても又紀れきつしと思
世の人ニ妙なりしたれき詞を譲りとく
風雅の佳境に禅眼を探りしを
ぞくや一時をなさん間さんを
さらハふゝに歌まくら涼しみは

進文の心でなや将し羅外れ牧笛
に弄う昧の夏也破れや是阿鼻
文衣襟れ玉をさきに在の名所で
またふかくりしに残りの花補か傳れ
作様にさいうらでなつひく相制しつの
酒かやかすれがくしひはいかうかれん
とうちつんるさ酒もうしやよし
作のまや翁湖か露しく音迄の場

は霊のきさぶいで定で居つと卯の花
れありありく橋雑かな治けでござれ
着きい枕のさきも秋れ為にく伏の
ならしいと志うれい枝打の降りには間に
ええ奴秋を發るう時根の雲林
獣の樺て夕れきさうひではくし
秋空の紅にてれくいは清の里
れ眠かうんと彼まさ東一派りの情はし

と行すゑふ月の望ハ彼地にあらん
難かれ
胸中とおもく捨の月
嶽ハ何の嶽何の岩と曉けれ
明わたる雨の色香もくは
みよすかにはと云のやさしのもの哀ハ
くるや時雨の名にかゝりて庭露
落葉ふ人の幣ふていふのむかし

を取れをきさらしに拾ひん芸
比里の葛れをもらんと鉄おて
まつらは寂中に幽玄を初祖
の西行に命ふくめ無欲のまゝ
名といふなれ
かけ笠れ見の同しやう大隠

後序

先人の高卑ハ市中にかくる
市中にありて田畝居せし
園ハ御を茶ゆしく
花柳をも草花をせさるハ
東白翠の熟つもるをみんく
四時よ具を携へて学寂

と詠せ給ひし後猶此
草稿を作める跡あまたハ
郊外に道ありとして藤枝
のわたり海ぞひなるハ道祖神
にまうでゝハ羨望せし
風に随ふ落波の月を
写し書出しふに打よ
いつまか詠せんといひける

なかりしかば都に
伝へ梓に彫刻せんとし
是ハ余を彼の道に頼ミ
もてなれる跡韓愈の
子厚文の字を正せしに
似たれど天下の反古
に記し侍るを集くあつめ
某家の序をそへて校

早稲田大学図書

しらく小國子えなのかり

まなほう人

京寺町二條

橘屋治兵衛

梓行